

上智短期大学キャンパス・ミニストリー活動の 40年をふりかえって

岩崎明子

0. はじめに

この論文では、短大のキャンパス・ミニストリーの視点から、アジアの中の日本におけるイエズス会のカトリック高等教育機関としてのその活動の役割を再考したいと思う。

1. イエズス会の霊性と教育目標

短大の英語科としての目標を解釈するなら、学生達が自分の生きる意味と価値を知り、社会の現実に対する知識を身につけ、他者と対話し協力してより良い社会の共通善を実現するために、自分に与えられた能力を生かし行動できる人に成長することである。そのために、英語力を高め、より広い視野とコミュニケーション力を身につけるだけでなく、宗教的霊性を深めることによって自己と社会に対する洞察力を深め、様々な奉仕の体験を通して内面的な成長をめざすことである。つまり、知識やスキルのレベルを高める目的は決して自己満足でおおわず、現実社会とその問題を洞察し、その解決のために他者と協力して最善の方法を探求できる人になるというより大きな目的に向かっている。

この目的は、イエズス会の創立者であるイグナチオ・デ・ロヨラの精神につながっている。自分の世俗的栄誉を求めて生きてきたスペインの騎士イグナチオが、霊的な回心を経て「より大いなる神の栄光のために (Magis)」神と人に奉仕するイエズス会修道会を創立して以来、イグナチオの同志たちが、「人々の魂の救いのために」霊的指導を行い、「最も貧しい人の状況に」必要な実践的な奉仕活動をおこなってきた。現代用語でいえば、人間が生きるために必要なエンパワーメントを霊的、実践的な、両側面から行ってきたことになる。イエズス会はもともと学校教育を目的として創立されたわけではなく、ある時代の社会の若者達の霊的な指導のためには、より効果的な手段と方法が、学校教育という形であったというのが、実態のようである。だから、時代の要求が変われば、イエズス会士たちの活動の現場は、変化する。

ところでここでいう「霊的指導」というのは、イエズス会の霊性の根底となる「聖イグナチオの霊操」を指しており、この「霊操」は、イグナチオが回心の後に放浪しながら、祈りの中で「神の意志に沿う正しい霊の動きと色々な誘惑に誘う正しくない霊の動きの2つの

方向の霊の働き」が自分自身の中にあるのに気づき、どのようにしてこの2つの霊を見分けるかを自らの体験からまとめた霊的な指導書である。この霊的指導を受ける人はその過程で、霊的な刷新をうける。霊的な刷新とは、その人の生活の中で、無秩序で混沌としている部分を整え、その人の本来あるべき人生の目的への道を見極められるような内的洞察力をつけることと、新しい行動を選ぶための明確な動機と力をつけることである。霊操は30日間をかけて人生の重大な選択を行うような祈りだけでなく、それを1週間の黙想や働きながらする日々の黙想というように、対象者により呼応する形で霊的指導は行われる。その過程では、人が自分の存在の「原理と基礎¹」を知ることから始まり、イエス・キリストの生涯を黙想しながら自分の具体的な生き方を考察していく。許された罪人である人が主イエスとの出会いを果たし、イエスの生涯を見て、イエスの受難と復活の神秘を黙想の中で体験し、最後には「すべての物の中に愛である神を見出す」観想（愛の観想といわれる）で締めくくられる。霊操の目的は、先に述べたように「人を真の霊的自由に導くために色々な霊的な運動（エクササイズ）をとおして、人間の作られた目的（原理と基礎）に達するように生活の価値基準を整え…霊操者が秩序づけられていない心の動きや愛着に流されることなく、自由をもって選び決断できる」（ネメシュ）ようにすることにある。また、「霊操者が、神の体験をし、その体験から生じる、真の自由を得て、「沈黙の中で神から頂いた悟り（回心の体験）が世界・教会を貫いた悟りとなる」という霊操の特徴をバレラ師が述べている。つまり、霊操者から見れば、霊操を通して、神から無条件で愛される存在であるという自覚が生まれて、自由な心でありのままの自分を受容し、過去の出来事を洞察しながら自分を刷新するための「気づき」や霊的な賜物を与えられるだけではない。その賜物を他者の救済のため、社会的奉仕に使うという望みや行動につながるダイナミックな霊の働きを体験することになる。

しかし、以上のような霊操の精神を日々の生活に実行するために必要なのが、「意識の糾明」であるといわれる。すべての被造物（自然界、人間自身、人間が作り出したものを含む）は根本的に良いもので、ただしそれを使用する側の人間の心や目的や手段次第で、人間のより良い生き方を阻むものとなる。それを、日々の生活の振り返りの祈りの中で見極め、よりよく刷新できるように神に光と導きを求める霊的な「意識の糾明（Examination of Consciousness）」は、「良心の糾明（Examination of Conscience）」とも言われる。

この良心の糾明は、祈りの中で一日の出来事を思いめぐらし、すべてを感謝することから始まる。自分の心に聴きながら、生活の中でどこに神の恵みが働き、どこにそれを阻む、自分の考えや行動があったかを振り返り、自分の考えや行動を支配する根本的な動機を明確化

1. 原理と基礎の要点は、1) 神が私達を創られたのは、この世で私たちが神を知り、愛し、仕えるため、永遠に神と共に生きるためである。2) 地上のすべては私たち人間のために創られた神の賜物である、神をもっとよく知り、もっと深く愛し、もっと忠実に神の助け手となるためなので、その目的を妨げるものから離脱しなければならない。3) 賜物に対する選びは、不偏心（どちらにも偏らない心）が必要で、神が私達を創造された目的に何がよりよく導くかを考えて選ぶことである。

して、神の望みにかなう（＝人々の救いにつながる）より良い生き方ができるように新たな恵みを祈るやりかたである。この良心の糾明は、人がより真理にかなう「選択」と「行動」を行うための指標と生活のサイクルを生むと考えられる。

この良心の糾明¹によって、自分の日常生活に神の存在を見出し、その存在の光によって、出来事の表面だけではなく、他の出来事との深い関わりを発見させ、自分の行動の深い動機を見極めさせる。これは少し Critical Thinking や心理学的的分析や考察のやり方と似て見えるが、大きな違いは、祈りの過程で、結果が一見否定的な出来事の中にも、「神の恵みの働き」に気づくという点であろう。また、逆に見人間的に成功に見える出来事にも「恵みとは逆の働き（＝人々の不幸につながるもの）」気づく点である。この「気づき」によって次の行動を決定することができるのである。

この「良心の糾明」と「気づき」と「行動」のサイクルが、イエズス会の教育には深い関わりがある。『イエズス会の教育の特徴』（1986）では、「イエズス会の教育は、この世界に対し肯定的である。人間的共同体の中で各個人の全面的な発達を助長する。その教育全体に広がる宗教的次元を含む。使徒職の一つの手段である。信仰と文化の対話を促進する。(p24)」と述べられているが、このような教育の世界観や人間観にも、霊操の原理と基礎に裏付けられた目標からも、聖イグナチオの霊操が深くかかわっていることが認識できよう。

イエズス会が、めざす教育目的は、各人の個性的能力や資質を十分に発達させ、生涯をとおして喜んで資質を伸ばし、開発したこれらの能力を他の人々のためにつかう…奉仕するリーダーの育成である (p52) と本書ではのべ、その奉仕には、(原理と基礎にあるような)「神への信仰と献身」をその土台とするとある。特にその高等教育でのイグナチオ教育理論では、3つの主要点、体験 (Experience)、内省 (Reflection)、実践 (Action) を持つといわれ、それに学習環境 (Context) と学習のまとめと評価 (Evaluation) が付加された形で、学びのサイクルが構成されているが、この教育理論にも、「意識の糾明」の方法が生かされているといえる (梶山 2013)。

このような、「神への信仰と献身」を土台とする奉仕とイグナチオ的教育理論は、上智短期大学のパストラル・ケアやサービス・ラーニングには、欠かせないものだと信じている。なぜならば、上智短期大学のキャンパス・ミニストリーの活動は、まさにこのような霊性の中から生まれてきたものだからである。

2. キャンパス・ミニストリー活動とは？

短大のキャンパス・ミニストリーの歴史をふり返る前に、キャンパス・ミニストリーの活動と役割について一般的な知識を簡潔に述べておきたい。カトリック・プロテスタントの人口の多い海外の大学と、人口の1%に満たない日本の大学では、カトリック大学といえども

活動の目標や方法は当然異なって当たり前であるが、対外的には、日本ではプロテスタントの大学の方が建学の精神に関わる部署として、そのミニストリーの役割に重点を置いているように思う。後付の資料（国内カトリック校、および海外イエズス会系のカトリック校）にその特徴をあげたが、一方、生徒の40～60%以上がキリスト教信徒である欧米諸国の大学等の高等教育機関では、聖書研究、典礼参加（聖歌隊、ミュージック・ミニストリー、ダンス、聖劇も含む）、祈り・礼拝（学年別静修会、教職員静修会、諸宗教礼拝）、Fun-Time-Sharing（Coffee talk、ゲーム、イベント、パーティ、キャンプ）、小グループでの信仰の分かち合い、社会問題研究会、コミュニティーの福祉活動（Outreach program）、信仰養成（キリスト教養成講座、CLC活動（Christian Life Community）などの部門が含まれ、ミニストリーの中心には、チャプレンと呼ばれる指導司祭とキャンパス・ミニストリーの担当者が数名部門ごとにおり、4年生大学ということもあり、学生が活動部門のリーダーシップを取っている非常に活発な大学もある。また、公立大学でも、各宗教やカトリック、プロテスタントの主な宗派ごとにキャンパス・ミニスターが置かれ、学生のパストラル・ケアにあたり、小規模な形でキャンパス・ミニストリーを中心に聖書の勉強や礼拝や集会を行っていて、その形態により、ユニバーシティ・ミニストリー、カトリック学生センター、ニューマン・クラブ²など呼称は変化している。

3. 短大におけるキャンパス・ミニストリー活動の歴史

短大の主な歩みについては、平野教授による創立40年のあゆみ³に詳しいが、上智大学100年誌では、キャンパス・ミニストリーのオフィス開設は1984年となっているが、ミニストリーの活動自体は、その初年度から開始されたと考え、(1)1973年、(2)1984年、(3)2008年から現在に至るまでの3期に分けてその歴史を振り返り、学生や地域社会にどのような精神的・教育的な効果を与えたのかを考察する。そこには、学生の要請と社会の必要に従ってその活動の方向性や手段を柔軟に変化させてきた軌跡を見る一方で、その確信の根幹には活動を導くキリスト教の霊性と、成熟した心と国際的な教養のある女性を育成するという教育精神がつねにあったと信じる。このために、イエズス会の霊性を持ち、女子の幼児教育から中等教育に海外で実績があり、日本でも女子寮を通しての教育に経験のある聖マリア修道女会が、短大女子寮の運営と教育の任務に、イエズス会士と共に協働することになった。

-
2. ニューマン・クラブは、1880年代にイギリス、オックスフォード大学で、カトリック学生の有志がカトリックの霊性を高めるため集会を始めたのがきっかけで、米国の州立大学や国立大学にも1890年以降にその運動が広まった。
 3. 平野幸治（2013）上智短期大学部創立40周年のあゆみ 『ALMA MATER SOPHIA わたしたちの上智大学』100周年記念祭ASF実行委員会

(1) 草創期 1973年～

草創期のキャンパス・ミニストリーの活動を取り上げる前に、短大の草創期前後の、日本や国際社会の動きを整理してみようと思う。

まず日本では、1968年～69年にかけて70年安保闘争と言われるインドシナ反戦と日米安全保障条約反対する大学生運動が全国的に波及し高等教育機関が大いに混乱した。沖縄返還の問題も絡み、学生派閥間の暴力闘争にまで発展した事件となった。また、70年は、大阪で万国博覧会が開催された記念すべき年であると同時に、日本航空「よど号」のハイジャック事件が起これ⁴、公害の水俣病の被害者に対し水銀を垂れ流したチソとの裁判が始められた年である。また、1972年は日本の連合赤軍が「浅間山山荘事件」でテロ事件を起こし、1973年1月に長年続いたベトナム戦争がようやく終結した年であったが、それ以降10年以上の「ボートピープル」に代表される政治的国外避難民を多数生む新たな国際問題の幕開けの年ともなったのである。

このような国内外の政情不安の中で短大が誕生した意味は何であろうか。国際的な視野と実践的英語力を持てるよう、自分の意志を明確に伝達することのできる、世界の架け橋となるような女性像を創立に関わった教育者が理想として考えたのだとすれば、これらの社会の動きは少なからず関係したはずである。

この草創期のキャンパス・ミニストリー活動は、聖マリア寮での活動と短大での教育を含めて全学で行われていたものとする。専任教員18名、非常勤教員26名、職員8名で、翌年には500名の学生を指導したと記録にはあるが、その中に司祭、修道者、信徒の割合が非常に多かったのである。キリスト教の精神の生きた証人が大勢いた時代で、授業外でもキリスト教の精神が聖書研究を通して学ばれ、各先生がたの講義を通してその精神性に自然にふれることができた恵まれた時代であった。四谷にある上智大学まで信仰講座を受けに通った学生や、寮でも学校でも聖書の勉強や生活を通して信仰体験の分かち合いのできる信仰共同体ができ、それを核として静修会や黙想会の参加者も少なくなかったといえる。また、聖マリア寮で始められた、文化祭やスポーツ行事が次第に、学校の行事として取り上げられるようになったのも学校の共同体意識づくりを高めたと考えられる。一方、社会的な活動は、老人ホームの訪問やこども病院の訪問などに限られていた。

(2) 発展期 1984年～

この時期は、米国ではアップル社がマッキントッシュ・コンピュータを発売し、スペース・シャトルが打ち上げられ、サラエボやロサンゼルスでは、オリンピックが開催され、テク

4. その中の人質には、後にバチカンの枢機卿になり教皇庁移住移動者司牧評議会議長任命され、濱尾文郎神父や、聖路加国際病院理事長（同名院長）となる日野原 重明医師がおり、その影響から前者は国際難民の保護活動に、後者は、ホスピスの活動推進といのちの尊厳を優先する医療に生涯を捧げるきっかけになった事件だといわれる。

ノロジーの技術発展が目覚ましかった時代である。一方、インドシナの混乱から難民の数も増え続けると同時に、フィリピン等の発展途上国における貧富の差や軍事政権による腐敗、多国籍企業による貧困国への搾取の問題が取り上げられ、NGOの活動も活発化した時代である。40周年記念誌にあるように、短大でも、カンボジア難民が短大地元の秦野市で、外国の生活に馴染めず、精神的に追い詰められて殺人事件を起こすという痛ましい現実があった。それを機に学生達から日本語を難民の方たちの家庭を訪問して、教えるという活動を協力者がリレーをして開始した。はじめ、Sister コルテスの研究室で、キャンパス・ミニストリーの一環としてはじめられた、この「家庭教師ボランティア活動」は、キャンパス・ミニストリー活動の大きな部分を占めるようになり、この家庭教師ボランティア活動の成果で、高校や大学に入ることができた外国籍の子どもたちも出始めた。また、卒業生で社会人となったボランティア経験者がコーディネーターをし、有能なスタッフとして学生達を支えた時期には、約200名近い登録者にまでなった。一方、それだけの人数を派遣するために、キャンパス・ミニストリーの担当スタッフの仕事が過重となったことや、その活動を長年推進してきた担当者が、それに専念できるように、他のキャンパス・ミニストリーの活動と分けられたのが、2006年のことである。その後、家庭教師ボランティアの活動が、GPに取り上げられ、2008年のサービ斯拉ーニング・センターの立ち上げに伴って、学校のセンターとして活動をボランティアと学習センターとなり、組織や実践方法を大幅に変更したという実態がある。クリスマス会の行事も、学校行事に移行された。

(3) 過渡期 2008年～

教員における司祭、修道者の割合が減るに従って、それまでキャンパス・ミニストリーが行ってきた、聖書研究や祈りの会の企画自体が、担当教員のための活動となり、実際的なミニストリー活動を行える時間の余裕が十分に無くなってしまっていることが、近年の問題である。宗教担当のチャプレンである司祭が、行事の典礼を担当し、毎月のミサを企画し、聖書研究や黙想会を企画しても、それに継続して参加しようとする学生のグループを作ることが非常に困難な時期であり、それでも個別対応のパスラル・ケアに努力している状況である。

4. 短大キャンパス・ミニストリーの今後の課題として

短大キャンパス・ミニストリーの問題を取り上げ、課題を考える上で、社会の変革（日本とアジア）、家族の状況、学生自身の必要性をどうしても考慮する必要がある。また、短大キャンパス・ミニストリーの小さなグループとして始まった活動が、より大きくなり組織化され、ラーニングセンター設立や学校行事として活動が発展し継承されてきたことには意義がある。しかし一方で、人材養成の課題と組織化し、マニュアル化した内容に対し、根底に

ある精神性を伝える方法を探る必要があることも否めない。それを見直し刷新するための祈りと洞察がミニストリー・スタッフ、否、信徒の教職員全員に必要だろう。そのために、「神への信仰と献身」を土台とする奉仕とイグナチオ的教育理論に基づく学習法を短大教育として真剣に考えていく必要があるだろう。

さらに、短大キャンパス・ミニストリーの課題と展望を考える上で、いくつか考慮すべきキーワードは、①学生達の霊的ケア、②日本の震災の復興への連帯、③アジアの教会からの課題である。さらに、そのために、現在のキャンパス・ミニストリーが今後力を入れるべきことは、イエズス会の霊性を持つ教育機関として、学生や教職員が各自の宗教的霊性を深める機会や、人間的な成長の場を探求するために必要な手段を明確にし、提供していくことだと思う。

と同時に、日本の社会の一番の課題である、東北地方の震災と福島原子力発電事故で被害者に継続して寄り添うこと、社会的弱者の側に立つことの大切さを少数であっても心ある学生の体験の分かち合いを通して大事にしていく課題がある。このことは、四谷の活動や他大学の関連活動との連携で長期につながりを保つ方法を探る必要性を感じている。

また、多言語・多宗教・多民族の複雑な文化背景を持つアジアの中で、イエズス会系のカトリック高等教育機関として、神奈川県秦野市という立地条件の下で、2年間の英語専門教科を中心として勉学するために、全国から入学する学生たちに、キリスト教の精神を基盤に、勉学だけでなくクラブ活動や奉仕活動や聖書研究を通して、「自ら成長し成熟していこうとする生徒の望みに応えてゆく」ためには、60%以上がクリスチャンである国の大学のやり方は十分な参考にならないだろう。そのためには、アジアの教会の実態をもっと知り、その生き方や課題を知り、研究し、そこから学ぶ必要があるだろう。そのためには、下記のようないくつかの課題がある。

- ・各国の文化の中にある福音を見出すこと、福音に反する慣習、流行に抵抗する。
- ・アジア司教協議会 (FABC) における青年司牧の指標を取り入れ、アジアの若者達の置かれている状況、困難と希望を知ることやその青年大会への参加者を促進すること (短大とほぼ同じ40年の歴史を持つアジア司教協議会 FABC は、ベトナム戦争・インドシナ戦争終結と同時に開始された)
- ・多言語・多文化の複雑な背景を持ちながら、少数のカトリック者は、英語を共通語として平和・いのちの尊厳・自然環境の保護を同じ信仰を土台に対話のきっかけを探る努力をしているその対話の場に参加する機会のために実践的英語力の育成を促す。
- ・日本の独自の文化の中に、キリスト教の福音に通じる「Share 可能な」文化の価値を自覚し大切にしよう促す。
 - ーおもてなしの心、相手を思い遣る心、
 - ーFacebook も大切なツールだが、Face to Face を大切に
 - ーChristian Ethics: いのちを大切に

- 伝統文化を大切にする
- 季節を敏感に感じ、自然を大切に味わう
- 調和を大切にする心（音楽、人間関係、芸術、色彩
- ・ 日本の文化の中にある、福音に反する精神を明確にし、その壁を乗り越える努力を促す
 - 多様性への許容量が少ない、
 - 異種の存在に対し閉鎖的、風評で簡単に差別意識を持ちやすい、
 - 自分の意志だけでは決められない、
 - なかなか自分や身内を誉められない、
 - 上下関係意識が強い。
 - 相手の意見を確認する前に思い込みで評価しやすい、
 - 言葉を感情的に捉えすぎる、
 - 他者評価が自分の行動に大きく影響する、
 - 相手に迷惑をかけなければ何をやってもよいという自己中心的な考え方、
 - 経済発展が何よりも優先する、
 - 現状への感謝の気持ちより不満が多い、
 - 本当に自分の求めているものや目的が解らない、
 - 世界の実情にあまりにも関心が薄く無知である、自分中心の世界で生きている、
 - 本当の謙遜さではなく自己評価が低い

5. まとめとして

以上のような考察をふまえて思うことは、まず、何よりもキャンパス・ミニストリーのスタッフとして学校の文化の中での福音的な印、個々人の学生や先生方の日常生活のなかに働かされているキリストをみつけて、それを宣言し、ともに喜ぶ事から始めていくことが大事であると実感している。神様の不思議な働きは、心が忙しさに紛れていけば、簡単に見過ごされてしまう。イグナチオの精神に基づいて、若い人々の成長の喜びや悩みに伴伴できることのできる環境を何より感謝したい。どんなに、状況が悪くとも、若者は学び、変わり、成長し、世の中を変えていく力がある。それを信じて、彼らが自分自身の可能性に希望を持ち、愛の心をこの学校での体験を通して、より豊かに育むことができるように、霊的な支えとなれるように、努力をしていきたいと思う。

参考資料

- 梶山義夫監訳 イエズス会中等教育推進委員会編 (2013) 『イエズス会教育の特徴 The Characteristics of Jesuit Education』東京：ドン・ボスコ社、168 – 181
- 高祖敏明訳 イエズス会教育使徒職国際委員会編 (1986) 『イエズス会の教育の特徴』東京：中央出版社
- デイヴィッド・フレミング著、エドモンド・ネメシュ監訳 (1986) 『靈操の現代的読み方— 聖イグナチオの『靈操』の原文を理解する助けとして』東京：新世社
- 日本クリスチャン ライフ コミュニティ (CLC) 訳 (1992) 『CLCの生き方、CLCの仕組み』東京：CLC 発行
- ペレス・バレラ (1983) 『聖イグナチオの10日間の靈操』東京：中央出版社
- ホセ・ミゲル・バラ (1986) 『聖イグナチオ・デ・ロヨラ 聖操』名古屋：新世社
- オリエンズ宗教研究所「特別企画、座談、修道会・宣教会の刷新と使命、第4回 男子修道会／後編」福音宣教 2014年4月号、3 – 11
- Loyola Jesuit College “Ignatian Pedagogical Paradigm” Nov. 1, 2013 downloaded <http://www.loyolajesuit.org/IPP.htm>

附則

- i この糾明は、自己の「良心との対話」といえるかもしれないが、イグナチオは、人の中に起こる霊的な働きを真に見極めるために、訓練を積んだ指導者（司祭、修道者、信徒）との対話をすすめている。それは、指導者との「対話」の中で、「ことば化」された霊的体験は、話すその人の「現実」に即したものとなるからである。また、「ことば化」する過程で、感情的な混乱が整理され、新たな真理に気づくからである。

